

知的プラットフォーム推進全国フォーラム設立記念懇談会

～若者たちで未来をつくろう～

日時：令和6年5月27日（月）17:30～19:30

場所：憲政記念館 第一会議室

出席者：43名

<第一部>代表・幹事紹介

○司会

私たち20代から30代の若者世代を中心に、知的プラットフォーム推進全国フォーラムの設立準備を進めてきました。3月31日に設立総会を開催し、若者が未来に向けて挑戦できる知的プラットフォームを立ち上げました。

本日は、知的プラットフォーム推進全国フォーラムの設立の報告・紹介をし、皆様からの活動についてのご意見を伺う会となります。

1. 代表挨拶

○加藤孝明（東京大学生産技術研究所教授専攻：（都市計画，防災，地域安全システム学））

今日の趣旨は、若者たちで未来を作ろうということです。メンバーの若い力に期待したく、私は部活の顧問のような気持ちです。その第一歩として“若い力”という言葉の定義を行うことから始める必要があります。本日は80代の若者から、20代の年寄りまで多世代の方がお集まりです。この機会に「今の時代に必要な若さとは何か」ということを考え、世代を超えて刺激し合う場になればと思います。

世の中では、今の日本は大丈夫なのだろうかという声が多く聞かれますし、皆さんも感じておられるでしょう。いつの時代でも、社会に対する漠然とした不安は常にあります。しかし、今の日本の状況は、少しこれまでと違っていているように感じています。何が違うのかも、この場で議論して深めていけるといいなと思います。私も年齢的に、20代よりはそれなりに人生経験を重ねていますが、未来を考える際に、欠かせない重要なものは、絞って3つあります。

それは“知”、“コミュニケーション”そして“時代感覚”です。明治維新から80年で戦争に入り終戦。終戦から80年経った今、私たちは時代の節目に立っていると認識しています。時代の節目、不連続に変わってもいい時、新しいトレンドの目を打ち込む時だと捉えています。これが、今回設立されたフォーラムの第一次的な目標だと考えています。

今日ここに集まったいろんな時代を過ごしてきた年代の方たち。特に今の社会の形をある意味作り上げてきた時代を経験した世代が大勢います。これは非常に大きな価値があります。時代には色々な節目がありますが、過去をしっかりと理解した上で、一定の連続性をもって未来を考えることが非常に重要です。歴史の連続性のもとに、明るい次の時代が開けると確信しています。

これが、まさに「温故創新」です。“いにしえ”を温めて新しいものを創り出す。現代は社会の機能が進化した結果として、色々なものが細分化され、機能的で合理的

になっています。しかし近視眼的、短絡的になったとも言い換えられるのです。これはある意味、弊害で、社会全体から俯瞰、構想力が欠落しているように感じます。時代の節目の今こそ、この俯瞰と構想力が必要なのではないかと考えています。

この知的プラットフォームは、社会が必要としている力、構想力を育てていく場の一つとして私は位置づけています。

若者たちで未来を創る時、いかに知を深め、細分化された知の領域を超えて繋げられるかということをしっかり考えることが重要です。

メンバーは私を含め、若干貧弱な感じもありますが、まずは志を高く持ち、はじめは小さな一歩を踏み出し進みたい、いずれ遠くない未来に大きな意義のある足跡を残せると考えています。

○金田賢哉（本郷飛行機株式会社社長）

私は、16年間ベンチャーで働いてきて、技術の世界に長く身を置いて来ました。その中で、特にITなどの世界では、日本のプレゼンスが国際的に弱くなっていることをずっと目の当たりにしてきました。決して技術自体が悪いということではありません。例えば、社会実装ができないといったことが問題です。弊社は、一生懸命頑張っても日本では導入することができず、海外にセールスすると売れるということがよくありました。

その原因を考えると、社会の複雑化がひとつの大きな原因ではないかと思えます。戦後、コツコツとした努力によって作られた社会は、非常に複雑な利害関係があります。そこに若者のアイデアを出しても受け入れられません。ところが、海外では苦労せずに受け入れられます。この現実、日本の技術で他国を豊かにし、自国は置いてきぼりということに繋がります。

私は、ずっと海外で仕事をしていました。そしてコロナで海外に行けなくなり、日本国内に目を向けたとき、全く技術が進んでいないことに気がつきました。

日本の大学生は、文理を超えて、非常に優秀な人材が揃っています。新しいアイデアを持つ研究者がたくさんいます。しかし、最終的には社会との接点が掴めないことが大きな課題であると感じます。

海外の大きなベンチャーは、社会に飛び出す力を社会側から提供されているという背景があり、それが成長に大きな役割を果たしていると思えます。

私たちは、若者の弱い力ではありますが、それが束になり、議論を重ねて、先輩方の助けを借りながら、国の未来に貢献する。そんな会にしたいと思っています。

2. 幹事挨拶

○鈴木達士（合同会社トーダス代表）

私なりの知的プラットフォーム推進全国フォーラムの定義は『シニアの知見を借りながら若者のアイデアを実現する場』です。地震などの防災の専門家がいらっしやいます。そこで、市民が参加できる防災イベントなどをこれから立ち上げていきたいと思っています。

私はここ1年ほど参加していますが、だんだん組織として出来上がってきました。あとは何かを行うだけなので、仲間を集めて様々なことにチャレンジしていきたいです。

○鈴木優太（早稲田大学政経学部政治学科在学中）

この団体では様々なプロジェクトを行う予定があります。その中でも人口問題、金融、防災の3つを非常に大きなテーマとしています。若者なりにいろいろ頑張っていきたいと思っています。

○萬谷僚太（合同会社トードス副代表）

ニュース等で見ると、今の日本、日本に限らず世界的な問題として、若い世代の政治への関心が薄いということを感じています。その辺りをこの若い組織で盛り上げていきたいと思っています。

○近藤瑛輝（㈱日本総合技術研究所主任研究員）

事務局長と代表幹事を兼任しています。

（欠席メンバーの紹介）

3. 設立宣言

『現在、日本は、技術の遅れ、高齢化、過疎化、国際競争の激化など多くの課題に直面しています。これらは国の持続可能な発展を脅かし、特に知的資源の活用が不十分です。これを克服するため、情報技術などを利用し、効率的な知的資源の活用体制を構築することが必要です。これを実現するために「知的プラットフォーム推進全国フォーラム」を設立し、教育、研究、産業の協力を通じてイノベーションを加速し、持続可能な点を目指します。』

<第二部>顧問・アドバイザーの方々からのお言葉

司会進行を円より子様をお願いいたしました。

1. ご欠席の方からの応援メッセージ

○丹呉泰健（元日本たばこ産業会長、元財務事務次官）

知的プラットフォームの発足にあたりお祝い申し上げます。顧問の丹呉泰健です。数年前からパーキンソン病に類した難病のため出席できないため挨拶を送ります。私は1951年生まれで現在73歳ですが、振り返ってみて感じますのは時代時代で変化があったことです。

新宿区と文京区千代田区の境目の高台で小学生時代を送りましたが当時は新宿副都心ビルもなく、朝起きると家から富士山が見えました。その後東京は発展し高層ビルが乱立し変わりました。

中学校は開成中学に入り柔道部に所属し、中学二年の時東京オリンピックがあり、無差別級で神永選手が敗れ柔道王国としての日本が変わりつつあることを実感しました。

高校三年の時、学生運動が盛んになり東大の入試が中止になりました。当然あるものと思っていたことが無くなることに衝撃を受け、制度は永続するものではないと知ったのです。

その後大蔵省に入省し国家公務員として仕事をしてきましたが、橋本内閣時に省庁改革のため財務省と名称が変わりました。小泉内閣の時は総理秘書官として五年五カ月勤め、郵政民営化、道路公団改革に携わりました。

私が事務次官を一年間勤めた間に、自民党政権から民主党政権に変わったため、財務大臣は与謝野氏から藤井氏さらに菅氏、野田氏と四人変わりました。総理大臣は、麻生氏、鳩山由紀夫氏、菅氏 三人にお仕えしました。変化の多い時代があったのです。

昨今感じている変化はAIの登場で、それが良い方向か悪い方向かはわかりませんが、社会変化が起こることは間違いないでしょう。

1990年代は経済面ではGDPは世界第二位になりましたが、その後中国に抜かれドイツに抜かれ現在四位ですが、来年にはインドに抜かれてしまうかもしれません。最近はスポーツやアニメなどの分野で国際的に活躍する人材が出てきて喜ばしいですが、政治経済に関わる方々、学会の方々の人材育成も遅れをとらないようにしなければいけません、

今後皆様の活動に期待することは変化に戸惑うことなく諸問題について活発な議論をしてください。期待しています

○直嶋正行（元経済産業大臣）

このプラットフォームがやろうとしていることは時期に適したもので、大いに期待をしています。実行していくのは大変困難なことが伴うでしょうが、若者たちにぜひ頑張ってもらいたいです。そのためにはシニアの方々も指導をよろしくお願いします。

○城島光力（元財務大臣、元食品産業労働組合協議会議長）

今回のプラットフォームには、人口減少問題、防災問題から企業問題も入っていることを大変喜んでます。今、ワニの口と言われる財政のひっ迫や様々な金融の問題が出てきているので、ぜひこれからの将来に夢を持てるような財政や金融、経済について若者たちが頑張って研究し、いいアイデアを出してほしいです。

2. 参加者からの応援メッセージ

○向井保（元医療情報システム開発センター理事長、元通産省工業技術院標準部長）

私は80歳を超えていて、普段は様々な集まりに行ってもシニアの方々ばかりです。そこではよく「我々も若い人たちの集まりに出ないといけない」ということをシニア自身が話しています。年寄りなので何もできないかもしれませんが、応援したいと思っています。

最近少し考えていることは、日本のGDPの順位が下がっていたり、高齢者社会の問題をマスコミが取り上げていたりしますが、日本全体の雰囲気としては落ち着いているように感じます。

それはなぜか。

非常に大きいことは、日本は借金で回っているということです。予算100兆円あまりで、そのうちの40兆円が借金です。これだけの借金の国は他国にはありません。仮にその借金を消費税でカバーしようとする、今の10%から30%になります。それで普通の国になります。もしそうなると、さすがに今のようなのんびりとした日本は成り立っていないと思います。

我々は基本的なことを忘れようとしています。しかし現実の日本は数字が教えてくれます。是非、若い人たちにビジョンを出してもらいたいです。その前に現在の日本の色々な数字を知ってほしいです。

皆さんには、これからのビジョンと具体的な玉だしをお願いしたいです。また、名前に“全国”と付いているので、東京近辺だけでなく地域にも輪を広げていただきたいです。地域は大変なことがあったり、地域に頼らざるを得ないこともあったりすると思います。色々なトライをしている人が、北海道から沖縄までいると思います。あまり和を広げると手が回らないこともあるかもしれませんが、基本的なところだけ手を広げて、地域の人々とも手を繋ぐことを考えてほしいです。

○和田勝（福祉社会総合研究所代表、国際医療福祉大学客員教授、特定非営利活動法人あごら理事長）

やはり日本最大の問題は、人口減少に歯止めがかかっていないことです。今年の出生数は、私が生まれた少しあとの時代と比べると、4分の1程度です。これが問題ではないという人もいますが、社会の安定や活力等を考えると、一定の人口数、特に若い世代層がいることは不可欠です。

また、地域的なアンバランスが大きくなっています。人口の多い都会は、今までは得してきましたが、これから最も厳しい状況に直面することは当然です。しかし、定常的、安定的な状態にどう持っていくかということが日本の経済や社会保障などを考えると最大の問題であると思います。

私が仕事の中で感じていたことで、知的な活動あるいは積極性という点から見ると、

当時も今も変わらないなど。若い世代ほど保守的で変化を望んでいないという感じが当時からしていました。変化が起こりそうなことに対して、若く賢そうな人は問題を指摘します。しかし指摘するだけで、次の一步を踏み出そうとはしないのです。

薬に関しても、日本は新薬創出力・開発力をアメリカに次いで、時にアメリカを凌駕するよう時代もありましたが、今や日本の新薬の創出力はどんどん低下していて、このままでは日本は外国で開発された非常に価格の高いものを使うことになりかねません。すると、日本の医療保険制度、医療保険財政を圧迫するだけでなく、先進的、先端的な薬がなかなか日本に入っていない、日本で使える状態にならないという状況、ドラッグロスと言われるものが現実化しつつあります。

これを脱していくためには、今の若い人たちの積極的な取り組みや努力、その人たちの着想力を現実社会の中に展開していく仕組みが必要です。そのことから今回知的プラットフォームが作られたことは大変心強いです。積極的に色々な人を巻き込んでいくつもりで努力していったらどうでしょう。

大相撲でも入門して7場所目の23歳の人優勝しました。伝統やしきたりの塊のような相撲界でも大きな変化が起きようとしています。

ぜひ、日本の社会経済を先頭にたってまとめていく役割をこのプラットフォームが果たすことを切望します。

○船井洋文（特定非営利活動法人あごら副理事長、元東京都水道局、元日立製作所顧問）

日本の成長が止まって30年と言われていますが、20年前に失われた10年ということで、業界誌に論文を書いたことがあります。その後、あっという間に失われた30年と言われるような時代になって頭を抱えています。このままの状態で行くと、多分、日本は沈没してしまうのではないかという感じがします。ですので、このフォーラムで頑張ってもらって沈没を逃れる施策を考えてほしいと思いながら、皆さんの話を聞いていました。

○東明佐久良（GITAJapan会長、元東京ガスマッピングセンター長、大妻女子大学名誉教授）

私はこのプラットフォームの前身のSASの恩恵を1番受けたかもしれません。私は40年代に東京ガスに入りましたが、入社数年の時にSASの向井さんたちがアメリカに3週間出張に行かせてくれました。東京ガスというのは、非常に保守的で入社数年の社員をアメリカ出張に行かせるというようなことはありえなかったことです。そのような中で、私はメッシュデータの調査にアメリカに行きました。その出来事が私の人生を変えたようです。その後会社で土管の図面を全てコンピューターに入れるコンピューターマッピングの仕事はずっとやることになり、50代で大妻女子大学でコンピューター関係を教えることになりました。

つまり、このプラットフォームも皆さんの人生を良いほうに変えるかもしれません。ですから、ぜひ、こういう会をどんどん盛り上げてもらいたいと思います。

先ほどから、皆さん、日本は人口減少など問題があると言っていました。それはその通りです。しかし、そのような難問が目の前にあるということは、若い人にとっては幸運です。難問は、技術力、科学力などを結集して解決していくべきです。時間はかかるかもしれませんが、解決できない難問はないと思っています。注力して解決す

べき題材があるということです。

ぜひ、そういう難問に挑戦して、将来、日本だけでなく、人類全体をいのように持って行ってほしいと思います。皆さん、そういう問題意識を持ってこの会を発展させていってください。

乾杯の音頭を上野博史様にお願いいたしました。

○上野博史（元農林中央金庫理事長、元農林水産事務次官）

今日は、諸先輩に財政問題、人口問題など、お話をいただいてありがとうございます。

今日、知的プラットフォーム推進全国フォーラムがめでたく発足し、加藤代表の話にあったように「まだ小さいけれども、これからだんだん大きくしていく」こういうことだと思います。資料を読んでも若干わからないなと思っていましたが、これからの活動の中でおいおい、はっきりしてくるだろうと期待をしています。

昨日の朝日新聞の一面に、スパコンを動かす AI という記事が載っておりました。それを読んで、私は「どうもシンギュラリティの時期が来たんじゃないのかな」というように思いました。従来はどちらかというと“理系知”の方が先に進んでいて、“人権知”が遅れているという感じだったのですが、これから AI の時代が進んでいくと“人権知”の分野にまで、いろいろな影響を与えてくるのではないかと感じて、その面での活用内容を、今後考えていく必要があるのではないかと考えていたところです。

いずれにしても、現在の問題は我々、前の世代が残した問題でもあります。しかし、それぞれの時代で、自分の時代の問題として対応し、解決していかないといけない。これが人生です。これから若い人たちに大いに頑張ってもらって、自分たちの人生を切り拓いていただきたい。その意味で、この知的プラットフォームに大いに期待をいたしまして、乾杯をしたいと思います。

知的プラットフォーム推進全国フォーラムの発足をお祝い申し上げまして、今後ますます発展することを祈念いたしたいと思います。乾杯！。

○大倉多美子（女性科学者の会理事、慶應義塾大学医学部非常勤講師、薬学博士）

これからどのような若者を育てていくのか。

まず、日本が国際的に一番遅れている原因は女性が働きに出ていないということです。国際的に言うと日本の女性は 145 か国中、142 位くらいという評価です。経済、政治分野、教育、すべての分野において、日本では女性というのは虐げられてきました。今、国の組織の会議等に出ることがありますが、ほぼ女性はいません。いたとしても 3、4 人というのが日本です。

国の組織で女性がこんなにいる国は珍しいのではないかと思います。日本の女性は非常に優れているにも関わらず、学術の世界でも国会議員を見ても女性は数%です。国民の半分は女性です。であるのにも関わらず、国を運営するのに男性が全部仕切ってしまう男性中心社会が日本を悪くしていると思います。

日本の女性は、家事をこなし、子どもを産み育て、一人前にして世に送り出します。女性ほどよく働いて、聡明だという人が非常に多いということを自覚してほしいです。それを変えるためには、若者を叱咤激励して鍛えていく時期が必要です。若者は甘やかしてはいけないと思います。

日本を安全な国、未来のある国、生活しやすい国、そういうのに導いて行くのが男

性の仕事だと思えます。今は、特に若い男性に対しては甘やかしの構造があって甘やかしすぎです。若い女性が子どもを産んで教育して育てている間、男性がうんと頑張らないといけません。

そういう面から言うと初等教育から甘やかしの構造だと思えます。叱ったりするとパワハラだとか言ってきます。悪いことは悪いということです。昔は、先生方は怖いものでした。しかし子どもも自分が悪かったということを感じていました。それが社会に出る第一歩として普通だと思えます。

それが今は教育の世界では、全て先生が悪いようなことになっています。女性が高学歴になったからなのか、なぜか自分が偉いと思ひ、自分の子どもも一番偉いと思っています。だからこそ、何かあるとすぐに教育委員会に言いに行きます。これは女性が反省すべきところだと思えます。

今の時代がすべてを反映していると思えますが、もう一度、日本という国を見直して、未来のある、日本にいて良かったと喜べるということを若い世代に受け継いでいける社会を私たちの世代が残していかなければいけないと思えます。

私も 80 を超えましたが、せめて若い人たちにそういうことを教えていくことが義務だと思っています。戦争を知っている世代としては、今の日本はなくなってしまうのではないかという危機感を覚えています。

若者たちが働きやすく、未来を展望できるような、戦争のない平和な世界を構築していける、そんな若者を育てていくために私は援助をしていきたいと思えます

○村林裕（認定特定非営利活動法人トラッソス理事、慶應義塾大学客員教授（スポーツビジネス専攻）、元東京フットボールクラブ株式会社代表取締役）

私は 20 代、30 代の若い頃に SAS にお世話になっていたのですが、今日のカ藤先生の「このフォーラムは、シニアの知見を借りて若者のアイデアを実現する」という言葉がわかりやすく、ヒントがあると思ひました。

ただ、私たちの若い頃のシニアというのは大体 50 代くらいだと思ひていましたが、すでに私も 70 で、他 80 代の方もいて、どこまで上の世代の知見を借りないといけいいのか、大変だと思ひます。とは言ひながら、若い人たちは、自分たちでやりたいことがあれば、年寄りの力を使うこと。そうすれば、おそらくやりたいことが実現できるわけなので、その年寄りを動かすことも、皆さんの力をもってやってください。私自身は、実はまだ現役でおりまして、目標を達成するために頑張ろうとしてるところです。皆さんが年長者を利用する、私も大いに使ってほしいと思ひますし、皆さんに使ってもらえるぐらいの頑張りをこれからもしようと思ひますので、機会があればいつでも来ててください。

○逢見直人（公益財団法人富士社会教育センター理事長、元日本労働組合総連合会会長代行）

今、先が真っ暗でどうやってこの先進めていこうかという状況だと思ひますが、私が社会に出たとき、1976 年ですが、その時もやはり先行きがものすごく暗かったです。第 4 次中東戦争を契機にして石油ショックが起こって、日本は 32% 物価が上がって、その翌年に日本はマイナス成長になり、インフレと不況が同時に来たという、そういう時代でした。

そして世界的にはローマクラブが「成長の限界」という本を出して、世界の人口は

増加していく、それに食料生産は追いつかず、飢餓と貧困が地球全体に襲ってくると。そういう問題をどのように解決していくかとか、国内ではロッキード事件があつて毎日、新聞はロッキード事件の報道ばかりでそれ以外のことがないかのように、世の中は翻弄されていました。

そういう中で社会に出て、私は自分で何ができるか考えて選んだ答えが労働組合でした。そして45年ずっとやっていたわけですが、ずっと心がけていたのが“一遇を照らす”という最澄の言葉でした。世の中が真っ暗になっている時、自分の足もとにひとつの灯りを照らす、その灯りが集まったらどんどん明るくなっていくという意味です。それで、まずは足もとから、僕の場合は労働組合の活動を通じて世の中に何かできることがあればやっていこうという、そういう思いでやってきました。

今の若者にそういう思いをぜひもってほしいです。しかし、うまくいくとは限らないし、挫折することもあります。1回でうまくいくなんてことはなく、何回もチャレンジして、ようやく一歩ずつ進みながらなんとか実現できます。失敗して跳ね返された時、私はただ布団をかぶって寝ていました。しばらくするとずっと寝ているわけにもいかず、起きると、またチャレンジしてみようということでも鬱にもならずやってきました。チャレンジして負けても、めげてはいけない、もう一度チャレンジする。若い人たちにも、これからの中で、暗い中でも灯りをひとつでもふたつでも照らすということで頑張ってもらいたいと思います。

○鳩山紀一郎（元長岡技術科学大学大学院工学研究科特任准教授）

今日、田先生から若者に一言エールを送ってほしいという依頼で、趣旨を知ろうとこのフォーラムの資料を拝見しましたが、余計にわからなくなりました。ですが、趣旨としては“若い人たちはいろんなアイデアがあつて、それを社会実装していくためにシニアの方たちの意見を参考にしながら形にしていく、そのためのプラットフォームだ”というふうに理解をしました。

私は47歳で若者でもシニアでもないと思いますが、そこそこの経験はしてきたので若者の方たちの活躍の手助けなどができればいいなと思っています。

私は20年ほど大学教員として働いていて、大学の研究力がどんどん落ちていく様子を目の当たりにしていました。日本は研究費がなかなかつきにくいと言われていて、実際につきにくいです。

文部科学省も科学研究費補助金というものを毎年たくさん出しますが、中国やアメリカに比べると何分の1という規模です。そういう状況の中で科学技術研究を進めていくというのはなかなか難しく、若手は雑用ばかりでなかなか研究ができないというようなところもありました。それが理由かはわかりませんが、今、科学技術に関してトップクラスの研究成果を挙げている大学が沖縄にあります。沖縄科学技術研究大学院大学、通称OIST（オイスト）と言いますが、そこでは大量の研究費を使って、外国からも多くの研究者を雇用し、論文もたくさん出していくという形でかなり成功している事例だそうです。日本もそれぐらいの研究費を使っていければ、今の状況よりは改善するのではないかと思います。

おしまい、これから皆さん、議論をしていくと思いますので、その中で大切にしたいことを3点申し上げます。

1つ目は、まず論理を大切にしてほしいということです。色々な考えを持った方がいますが、その中で論理というのは基本的に皆さんに共通して存在するものですので、

この議論は論理的かどうかということを考えながら議論してください。

2つ目は、価値観の違いと論理をきちんと切り分けて考えてほしいということです。話しているうちにこれは価値観の違いなのか、論理の違いなのかがわからなくなることがありますが、これはどちらなのかということ切り分けはしっかりして議論をしてください。価値観は、その違いを埋める、あるいは理解しあうというのは難しいですが、少なくとも知ることはできますので、そういうところには気を付けて議論を進めてください。

3つ目は、自分の間違いを素直に認める勇気を持つことです。大人になると、間違いに気づいてもなかなか言い出せずにそのまま議論を進めるタイプの方が結構いますが、そうならないために、間違いは素直に認めて「これは間違っていた、考え方を変える」と言える勇気を持って議論してほしいです。

この3点に気を付けて議論することが、色々な意味で効率的、または意味のある議論をするのに有効だと私なりに思っているので活用してもらえればと思います。

○小宮善継（ロゴヴィスタ(株)社長、(株)ソーシャルビジネスグループ会長、(社)在宅就業支援協会会長)

色々な課題があって幸せだというお話がありました。しかし、個々の課題を解決して部分最適を作って、その先どうなるのかということについて、私は疑問があります。

まず、未来を作るために、未来をどう考えるかというところをみんなで議論をして、ビジョンを明確にする。その上で、捨てる部分と徹底的にやる部分を考えることが必要ではないかと感じています。

ぜひ若い皆さん、今、色々な課題、個々のというより国際的な課題を抱えているこの国をどのようにしていくのか、頑張って議論をしてもらって、ビジョンとして実現するために個々の問題をどうするのかを考えていただけたらと思います。

○森修一（デロイト トーマツ コンサルティング合同会社執行役員）

今日の会場が憲政記念館というところで、なぜだろうと調べてみました。するとこの場所は彦根藩の藩邸があったところで井伊直弼が住んでいたところでした。ここから桜田門に通う途中で水戸の脱藩浪士に暗殺されたというところなんです。その後、憲政の人として有名な尾崎行雄先生の記念館を経て、今、憲政記念館になっているということで、まさに知的プラットフォームにふさわしい場所でこの会ができています。

今日の話の中で1番心に残ったのが、大倉先生のもので、我々50代後半の人間は若い頃、特に中学、高校の頃は本当に体育会系でした。部活ではビンタやケツバットのある世界で、ずっと虐げられてきました。自分が指導する立場になったら厳しい指導をするなということで、非常に苦しい立場の世代です。

先ほど、明治以来の話もありましたが、そのころの日本では若者の力というのが、彼らの国を思う気持ちや前進しよう、変えようという気持ちがあったからこそ、時代は変わったのだと思っています。

そういう意味では、例えば黒船のような危機的状況、外圧のようなものがある時に急激にうまくアダプトしていくのが日本人の特性だと思っていて、皆さんが言っていた今起きている高齢化や少子化等の課題は緩やかに訪れている危機で、この緩やかな変化に対して日本人は非常に弱くて難しいのではないかと私は思っています。だから、

この緩やかな危機、変化をまず見逃さずに課題設定し、解決していくことがこれから期待されるのではないかと考えています。

また、顧問やアドバイザーの方々には若輩者が多いメンバーでやっています。皆様の英知をこれから結集していかないといけないということで、私も高校生に戻ったつもりで、部活の先輩ぐらいの気持ちです。部活の先輩が一番厳しいかもしれませんが、可愛いメンバーを助けていただけたらと思います。

○為石摩利夫（社会福祉法人恩賜財団母子愛育会常務理事、元厚労省）

この会に参加しているのは、母子家庭の就労をなんとかしたいというところから始まっています。社会的に受け入れ体制ができてない中、生活に困窮している方たちがいかに多いかを身にしみて感じており、少しでも役に立てればと思っています。

私は長い間、行政で子どもの福祉に関わっています。その中で役所の議論は対処療法であって、本質を議論しない、本質より先に改善しないといけない課題が目の前にあるので、そこに注目して検討を始めます。

でも、僕は「本質を議論しないで、どこに向かって行こうとしているのか」と常に思っていました。

先ほど小宮さんが将来を考えるということをお話されました。私もその通りだと思います。どこに向かうかがわからなくて、今、すべきことはわからないし、できることは限られます。

第一条件としては、向かう方向を間違えないようにすることです。川は山から海に流れます。大きな時代は同様に、必ずそちらに向かって行きます。それが自然の摂理ですから。

そういう意味で、流れをしっかりと意識して、自分が今、どこで、何をしているのかを考えていく必要があると思っています。

出雲の地域に「ヤマタノオロチ退治」という話があります。出雲の地域には斐伊川という川が流れていて毎年氾濫をしていて、その氾濫を抑えたのは、ヤマトタケルノミコトです。その証拠に、斐伊川の上流で砂鉄が採れます。そして、あの神話の中で、青銅の剣がオロチの尾から出てきたという内容があります。これは、基本的に砂鉄があったからこそできた神話だと思います。こういうものは時代の流れによっていろんな装飾がされますが、一定の流れはそこにあると思います。

今回、このプラットフォームは本質的にどこに向かうのかということを経営的な議論しつつ、今、何をするかということを考えてもらえれば非常に良い取り組みになるのではないかと考えて期待しています。

○吉田貴文（元朝日新聞・WEB 論座編集長）

以前、私が論座というネットサイトの編集長だった時に、円先生に1990年代から今までの政治人生について続き物を書いてもらいました。この90年代から今までの考えるというのは非常に重要なところなのではないかと考えています。

私がまだ政治部の1、2年目の若手記者だったころ、先ほど挨拶された鳩山先生のお父様の鳩山由紀夫さんが、ちょうど“さきがけ”を立ち上げて、その時からの付き合いになります。あの時はみんな未来を眺めて、この国をよくすることを熱く語っていました。どうなるかはわからないが、とにかく未来を見据えるのだという話でした。

由紀夫さんに後で聞くと、自分の政治人生で1番楽しかったのは、総理になった時

ではなく、“さきがけ”の時に乾杯をした時だと言っていました。それから30年、政治を眺めながら生きてきて思うのは、安倍さんは「日本を取り戻す」と言いました。取り戻すのは所詮“過去”で、レトロです。今必要なのは、創り出すことです。それをどうするのかという時には、結局創り出すのは若者たちです。

1970年の万博の時、私の叔父が20代の設計士で日本館を設計しました。その時上からは「自由につくれ、責任は全部俺がとる」と言われ、そういう中で作らされたわけです。あの時、なぜあのようしてくれたのかという話をすると、結局作るのは若い人だが、もしもそれを阻害するとすれば、それはその前に作られた小人のルールや評価システムなどです。それはおそらく我々が意図せずに作ってしまったものであり、それをどうやって壊すのかということが必要だと思えます。

私の話をすると、論座が廃刊になりました。その時「論座みたいなオピニオンサイトを潰すとか、恥だ」と話すと、上から新しいサイトを作れと言われて「Re:Ron (リロン)」という新しいサイトを作りました。その時に言ったのは編集長を30代の女性にしてほしいということでした。編集部は全員30代、40代。そして女性を2対1の比率にしてみる。ですので、今私の編集部は平均年齢40代です。その中にいると、やはりそういう人たちが時代を作っていくかといけないのだなと思えます。だからこそ、筆者も40代を起用し、たまに20代、30代も起用します。手間はかかりますが、話していると面白いです。驚くこともありますが、発想がとても面白く、しかも丁寧に生意気です。実は生意気ですが、言葉は丁寧です。

私の新聞社も昔はケツバットのような体育会系でしたが、今それは通用しません。

若者は丁寧に生意気に生き、それを私たちがどうやってキャリーしていくかという時代に入りつつあるため、そういう新しいモデルのこのプラットフォームの存在価値は大きいです。趣旨説明を見てもまだよく分からないところもありますが、どうやって作っていくのかというのを楽しみに見ていきたいと思っています。

○円より子（元参議院議員）

大勢の方から本当に励みになる様々なお言葉を若い人たちにいただきました。皆様から、何をするのかまだよくわからないというお言葉もたくさん出てきましたが、これからはっきりと、防災、人口減少、金融、それから安全保障など、色々なことを若者たちがやっていけるように、また大勢の方が全国から集まり、自分はこんなことをやりたいと、テーマにかかわらず出てくれば良いと思っています。

3. 閉会の挨拶

○近藤瑛輝(事務局長)

今この場から見渡すと、もう各会で活躍された、そうそうたるメンバーの皆様が、集まっていっぱいます。そのような方々に、私たちのプラットフォームを支えて頂けることほど嬉しいことはないと思っています。私たちは、これから私たちの国を少しでも良くしたいと思い、この場に集まりました。しかし、私たちはまだ、年齢が足りなく、経験も浅いです。これを、活躍されてきた皆様のお力を持って、支えていただきたいと切に願っています。皆様のご支援が必要不可欠です。皆様、よろしくお願い申し上げます。

以上

趣意書コメント

2024年3月27日 設立総会にて
長沼伸一郎

今までの日本は、悪く言えば二番手商法で生きてきました。とにかく、欧米で新しいものが生まれたのであれば、それを質の高い労働力で分散してやってきました。やはりこの方法が戦後はかなり有効で、電気製品などはアメリカで生まれたものであるにも関わらず、日本の方が質が高くて安いということで世界を席巻しました。

ところが、現在の中国などに代表されるように、今の産業は部品が世界中で共通化されているため、部品を集めてくれば世界中どこでも作れてしまいます。例えば電気自動車は、昔の自動車とは比べ物にならないほど新興国が質の高いものを生みだせるようになっていきます。そうすると、日本の優位が全て崩れてしまいます。今まではともかく日本しかキャッチアップができる勢力はなかったため、日本の少ない人口でも、上手くやっていくことができましたが、現在は中国やインドなどの人口の多い国々が同じだけのキャッチアップ能力を備えてライバルとして出てきました。つまり、頭1つ突き抜けるための重要な戦力が今の日本にはないと言えます。

そのため、総体的に少ない人口になってしまった日本としては、欧米の後追いではない新しいアイデアを、独自のものを使い、一種のアイデアの点でトップを走っていくことを行うしか方法がありません。現在のような状況に置かれているということが、今が歴史的に最も大きな転換点を迎えていると言っても良い一番の根拠だと思います。

ところが今まで日本はそのようなことやったことがありません。学問は欧米に留学をして、欧米の最新鋭、最新の論文をキャッチアップして、それを向こうの学会に評価してもらおうという形です。そのような形でできているため、日本の中で生まれたものを日本で広めていくというシステムが全く存在していないと言っても過言ではありません。このような状態で主導権を取っていこうとしたとしても絶対にできません。これは産業だけに留まらず、何か新しい産業が起こった際には、その生産やサービスをどうするかというルールが必要になります。しかし、そのルール自体も設定・制定する能力を失ってしまうと、ものの生産で優位に立てないだけでなく、ルールを作る状態でも優位には立てないということとなります。そういう深刻な状態に置かれている中で、なんとか自分たちの、日本で生まれたもので、日本が世界にリードしてやっていくために、新しい制度というものがどうしても必要になってきます。

それを行うためには、普通の処方箋に従うと(一般的に考えると)、とにかく欧米の1番最先端の論文を持ってきて、それに予算をかけて量産することだというように思いがちですが、人口では日本はアメリカの半分であり、アメリカの方が先んじて英語を使っていますし、明らかに優位にあるわけです。つまり、それでやっても勝ち目がないということは明らかです。

こういう場合に一番有効な方法論というのは、実はその最新の情報をむしろ絶ったグループというものを作ることの方がかなり有効に機能する場合があります。そういう場合、新しい情報を絶って新しいものを作らなければならないということです。アメリカの影響あまり受けない状態で何か考えないといけないということを強いられますと、意外と新しいことが生まれることが多いです。そういう場合にいちばん頼りになるのは、アメリカをはじめ近代欧米が見落としてきた古典とかの古い知識の中に、ヒントが隠されていることが多いです。

ところが、それを議論していたら技術の点で競争にはついていけないだろうということで、普通のビジネスの現場ではオミットされてしまうことが多いわけです。そこをコスパとかに囚われるのではなく、熟議をして、むしろ古い知識を皆で本当にこれ

は使えないものだったのかということも含めて新しい観点から議論をしていくことによって新しい、欧米ではない独自のものを作れる可能性が高いと言えるのです。

その際に、若い世代がそれを担うことは、単にこれからの主役が訓練をするというだけではなく、若い世代というのは、2 番手商法と成功体験をあまり持ちません。今まで、その成功体験を抜くというのは組織にとって非常に難しいことです。それをやるということは普通ではできないですが、むしろ若い未経験な世代を中心にするので、成功体験がないままさらな状態から新しいものを作り上げていくということができるわけです。これは一般のビジネスの現場ではなかなかそういうことはできません。そのため、そういうことをできる組織を作るということは、非常に意味のあることではないかと考えています。

また、文理融合は、結構世の中全体でも言われていますが、これも実際にやってみると結構難しいことが多いです。日本は特に遅れていますけれども、これは日本だけの責任ではありません。アメリカでも過去に、クリスをはじめ名だたる研究機関が膨大な予算かけて学生研究の試みをやろうという大プロジェクトを打ち上げて、鳴り物入りでやったことがありますは、それは結局全部失敗してしまいました。それはやはり、専門家を集めてきてその話をさせるということで、お互いの間の連携が取れないという共通した弱点を抱えていたわけです。だからこそ、あまり専門家を集めるのではなく、むしろ未経験の人を集めて、それで多くの分野で連携を取ることを考えた方がむしろ近道であるということが言えるのではないかと思います。そのためにも、その若者を主体としてそういうユニークなことをやっていく、そういう組織を作るとは非常に有益なのではないかと思います。

必要とされるのはそういうアイデアであり、こういったことは今まで意外に無視されることも多く、表面的な効率、表面的な情報のコスパということで脇に追いやるが多かったです。逆に言えば、アメリカといえどもこういうことはやってこなかったということです。盲点に当たっているわけですから、その盲点をつくということは一種の主効果を持つことになり、勝ちに進めるチャンスは普通の組織よりも大きくできるのではないかと期待しています。

逆に言うと、今までの日本は必要がないからそういうことをやらなかったわけですから、言い換えれば 2 番手商法でやってきたということです。2 番手商法で間に合ってしまうため、なかなかできなかったわけです。しかし、2 番手商法でいる限りは、いくら経済的にある程度反映したところで、やはり一種の属国で終わってしまいます。今この危機をむしろ積極的に逆手にとって、一種、知的な独立を達成するための契機にしようではないかと考えます。そのための最も有効な組織としてこの知的プラットフォームを活用するということを考えたいというのが、この設立の趣意であります。

長沼伸一郎：パスファインダー物理学チーム代表、物理学者